

おたや祭と山車

子

日本民話、天の羽衣の場

上宿第1場

昔むかし、ある山すその村に、いかとみという狩人^{かりうど}が住んでいました。

よく晴れた春の日に、湖の近くの山に登ってみよう^{てんにん おとめ}と行くと、湖の上を美しい天人の乙女たちが泳いでいるのを見ました。

いかとみがあたりを見ると松の枝に白い衣^{ころも}が風になびいて、天女たちの衣と思いい枚を取りました。

天女たちが湖からあがり、そのうちの一人が、「衣がない。」と悲しむ姿を見て、いかとみは、「天人の舞を見せてくれ。」^{てんにん}と言い、衣を返しました。

乙女は喜んで羽衣^{はごろも}を身に着けると、体が空に浮きあがり遠くをめざして舞っていきました。

風林火山“由布姫、我が子の行末を山本勘助に託す”場 上中町第2場

武田軍の諏訪攻略の際、諏訪頼重^{よりしげ}の娘、由布姫は山本勘助により助けられる。

後に、武田晴信(後の信玄)は由布姫を側室に迎え入れようと古府中(山梨県)に移すが、由布姫は晴信の側室になることを^{かたく}頑なに拒んでいた。しかし、正室三条氏の挑発的な言動を受けると、強気な由布姫はついに晴信の側室になることを承諾する。

一方、勘助は戸石合戦で武田軍を勝利に導いた功績^{こうせき}で、八百貫^{かん ぶろく}の扶禄と足軽七十五人を預かる身分となり、着々と武田家^{ち ほ}の中での地歩を固めていく。

しばらくして、由布姫は待望の男児を出産し、その報を受けた勘助はただちに姫の館へ向かった。

由布姫は勘助に向かって、「あなたの言うとおり、武田家と諏訪家の血を持った和子を産みました。」と、笑い声とも泣き声ともつかめぬ声で短く笑い、そして、「行く行くは、この子を武田家の世継ぎにしたいと思っています。」

と、何^{おく}の臆するところもなく言い切った。

あたりを見まわす勘助をよそに、由布姫はそっと、「和子を頼みます。」とつぶやいた。

この和子こそ、信玄亡き後、武田家を継ぐことになる四郎勝頼である。

ねずみの嫁入りの場

中町第3場

昔むかし、ある倉にねずみの夫婦が住んでいました。

やがて女の子が生まれ、その子は大きくなるにつれ大変美しい娘となりました。

両親は、世の中で一番強い立派なお婿さん^{むこ}をもらいたいと考え、そして、高い空から世の中を明るく照らすお日様以外にはいないと思いつきました。

娘と両親は、お日様のところに行き、「どうぞ娘をもらってください。」とお願いすると、お日様は、にこにこしながら、「それはありがたいが、私がいくら空でかんかん^{むこ}に照っても、雲が出てくるとすっぱり隠されてしまうのだから、強いのは雲だよ。」といいました。

娘と両親は、今度は雲のところに行き、「あなたが一番強いお方です。娘をもらってください。」と頼むと、雲は、「それはありがたいが、私よりもっと強いのは、風だよ。風に吹き飛ばされては私もかなわない。」^{むこ}といいました。

娘と両親は、今度は風のところに行き、「娘をもらってください。」と頼むと、「私よりもっと強いのは、壁だよ。私の力ではとても吹き飛ばすことができない。」というので、今度は壁のところへ行き、娘をもらってくれるように頼むと、「私がいくらがんばっていても、あなた方ねずみには穴をあけられてしまう。」といわれ、なるほど、今まで気がつきませんでした。が、ねずみが一番強かったのです。

娘と両親は、にこにこしながら帰り、娘は幼なじみのねずみと結婚して、幸せに暮らしました。

笠地蔵 “お爺さん、お地蔵様に笠をかぶせる” の場

下町・藤見町第4場

「笠地蔵」は、心の清いお爺さんじいが道端じぞうそんの地蔵尊に笠をかぶせてやり、その恩返しを受けるという話で、特に知られる昔話の一つです。また、この話では、「花咲か爺」、「舌切り雀」などのように、「善悪」の対比的な図式を用いていないのが特徴です。

純粹に正しい行ないをする者は救われるという展開は、ある種の仏教思想の観念に基づくものであり、せち辛い現代さとに生きる私達の心をあたため、癒してくれる話です。また、親が子に語り継いでいくことで、子どもに対し道徳を教え諭すという寓話的要素も持っています。

全国で親しまれているこの話には、異説も数多く存在しています。お地蔵様の数は、六体(六地蔵)が主流ですが、主に五体から七体の伝承があります。この数が、お地蔵様の御礼の仕方とも関わり、七体のお地蔵様が七福神になってやってくるという話もあります。他に、お地蔵様が一体でやってくる話や、宝物の代わりに老夫婦を極楽浄土ごくらくじょうどへ送り届けるといった場合もあります。

また、手ぬぐいの代わりにふんどし 褌をかぶせたという異説もあります。

巖流島の決闘の場

桜町第5場

宮本武蔵は、天正十二年(1584)美作国みまさかのくに(岡山県)大原町宮本に、新免無二斎しんめんむにさいの子として生まれる。二刀流を使い奥義を究めた剣豪剣聖の人であった。

佐々木小次郎は、越前(福井県)宇坂浄教寺うさかじょうきょうじに生まれ、小太刀燕返しつばめがえの秘剣を編み出し、後に巖流と号がなりゅうした。この両雄が関門海峡の早瀬の中に浮かぶ船島で、慶長十七年(1612)四月十三日、壮絶な戦いを繰り広げ、以来この島を巖流島と呼んだ。

武蔵は約束の午前八時を二時間遅れて島に着いた。陽は高く昇りきっていた。

小次郎は怒りを込めて、「約束の刻限を過ぎるとは何事ぞ。おく臆したか。」と言びぜんながみつい、備前長光の名刀をぱっと抜き放つと一緒に刀鞘を波間に投げ捨てた。

それを見た武蔵は、にやりと笑い、「小次郎破れたり、鞘は汝なんじの天命を捨てるものぞ。」と言って、權かいが風を切る。

武蔵の權が小次郎すがいの頭蓋を砕いたのと、小次郎の長剣が武蔵みけんの眉間の鉢巻を切ったのとは差はなかった。

武蔵は倒れた小次郎の死活を確かめ、検使けんしに一礼し、もとの船に飛び乗り、自ら權を取って素早く島を立ち去った。

おたや祭と山車の由来

長和町の古町(旧長窪古町)に所在する豊受社の例祭は、通称おたや祭として知られます。その起源は江戸時代末の、文政十一年(1828)の文書が、現在のところ最も古い記録として残されていますが、お祭はこれ以前よりかなり古くから行われてきたと考えられます。豊受社では伊勢神宮にならって、20年ごとに遷座祭が行われ、例祭は毎年1月14日の夕方から15日の昼頃まで行われます。お客のある家庭は、この日を年始にし、その歳の出発とするのを慣わしとしています。参詣の人々は上田、佐久方面からも訪れ、この2日間に4～5万人ほどの人出が予想されます。

おたや祭には、庶民の生活が安定し、余裕が出てきますと、お祭りを盛んにするために山車が奉納されるようになります。旧家所蔵の天保六年(1835)の日誌に記載されています、「御田(旅)屋賑わし、かざり物数ヶ所美事也」との一文が、現在判っている最も古い山車の記録です。

山車は、素朴な農民美術を伝承する貴重な伝統文化として、昭和38年に長野県無形文化財選択に選ばれ、現在は区単位の5場所の保存会によって奉納されています。